

『源氏物語』の「若紫」の巻における『遊仙窟』の受容

——「北山」を中心に——

蔡 芸

はじめに

『遊仙窟』は中国唐代の小説で、作者は張文成である。中国では明朝まで読まれていたが、戦乱を経て、散逸した。幸いにして、遣唐使とともに、日本に伝来した。日本には、写本も、注釈書も数多く残っていて、現代までずっと読み継がれている。

『遊仙窟』の書名が、現存する日本古典文学の作品中に初めて見られるのは、奈良時代の歌人、山上憶良の『沈痾自哀文』で、これは『万葉集』に収められている。同じく、『万葉集』の中には、憶良と同じ時代の歌人、大伴旅人の「松浦川に遊ぶ序」があり、『遊仙窟』の影響が多く見られる。それ以降の作品の中にも、『遊仙窟』は大きな影響を与えている。平安時代には、『遊仙窟』が広く読まれた。『遊仙窟』の章句と作者の張文成の詩句が『和漢朗詠集』や『新撰朗詠集』に採られている。また、張文成と則天皇后の逸話が『唐物語』に収録されている。

また、『源氏物語』の中には、『遊仙窟』の書名は見えないが、『蜻蛉』の巻に『遊仙窟』の言葉を踏まえた表現が見られる。平安時代の末期、

藤原定家の『奥入』には『遊仙窟』による注釈が初めてつけられている。さらに、『奥入』以降の『源氏物語』の注釈書は、『遊仙窟』による注釈を補増していった。室町時代の初期に、その数はピークに達する。

近代の研究者でも、『遊仙窟』と『源氏物語』の受容関係を詳しく論じている。丸山キヨ子氏の「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟―わかむらさき北山・はし姫宇治の山荘・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係」という論文の中には、「源氏物語の場面に遊仙窟がヒントを与えているのではないかと思われるところは二つある。わかむらさきの巻、北山における源氏君の垣間見、橋姫の巻、宇治の山荘における薫の垣間見の場面である」と指摘されている。

本論では、『蜻蛉』の巻に見られる『遊仙窟』の言葉を踏まえた言葉を検討したうえで、「若紫」の巻の「北山」の部分に注目して、「若紫」の巻と『遊仙窟』の受容関係を明らかにしたい。

一 「蜻蛉」の巻と『遊仙窟』

『源氏物語』の「蜻蛉」の巻の巻末近くの薫と中将のおもと（女一）の

宮の女房)の会話とそれに関わる『遊仙窟』の表現を引用しよう。

……箏の琴いとなつかしう弾きすさむ爪音をかしう聞こゆ。思ひかけぬに寄りおはして、^①薰など、かくねたまし顔に掻き鳴らしたまふ」とのたまふに、みなおどろかるべかめれど、すこしあげたる簾うちおろしなどもせず、起き上がりて、「^②似るべき兄やははべるべき」と答ふる声、中将のおもとか言ひつるなりけり。^③薰「まろこそ御母方のをぢなれ」と、はかなきことをのたまひて、^④例の、あなたにおはしますべかめりな。何わざをかこの御里住みのほどにせさせたまふ」など、あぢきなく問ひたまふ。

(「蜻蛉」の巻 二七一―二七二ページ)

『遊仙窟』

a 須臾之間、忽聞「内裏調^レ箏^レ之^レ声」。僕因詠曰、……

故故將「織手」

時時弄「小絃」

耳聞猶氣絶

眼見若為憐

須臾の間、忽として内裏に箏を調ぶるの声あるを聞く。僕因りて

詠じて曰く、……

故故織手を將て、

時時小絃を弄す

耳に聞きて猶ほ氣絶えんとす

眼に見なば若為に憐れまん

b 女子答曰、博陵王之苗裔、清河公之旧族。容貌似舅、潘安仁之

外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹。

女子答へて曰はく、博陵王の苗裔にして、清河公の旧族なり。容貌は

舅に似て、潘安仁の外甥、氣調は兄の如くして、崔季珪の小妹なり。

薰が、以前女一の宮を垣間見た渡殿を訪れた際、女一の宮は不在で、侍女たちが月を見るために、渡殿に集まっていた、箏の琴の爪音も聞えてきた。薰は、箏の琴を弾いていた中将のおもとのもとに近づいて、①「など、かくねたまし顔に掻き鳴らしたまふ」と言葉をかけた。また、『遊仙窟』では、張文成が、十娘が弾いた箏の音を聞いた時に、a「故故將織手、時時弄小絃」と詠みかけている。『源氏物語』の薰の発言は、『奥入』が、『遊仙窟』の「故々將織手一時々弄小絃」耳聞猶氣絶 眼見若為怜」の部分から引用したことを指摘している。

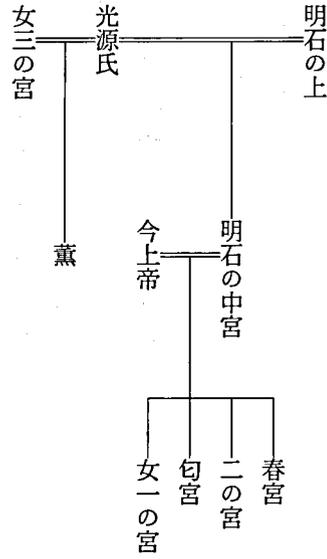
中将のおもとは、薰の発言を聞いて、②「似るべき兄やははべるべき」と言った。中将のおもとの発言はやや理解にくいところがあるが、『弄花抄』に

心は匂宮の事を思へり。女一宮に似給へる匂宮の、兄にていらせ給へるを見給へかしなどいふ心也。

と注がある。そして、薰が負けずに、③「まろこそ、御母方のおぢなれ」と答えた。出生の秘密に悩んでいた薰が、自分は女一宮の叔父であることを強調した。薰は女三の宮と柏木(頭の中將の長男)の妻子であるが、

光源氏の子として女一の宮の生母の明石の中宮の弟だと思われていた。だから、薫と女一の宮は、叔父（舅）と姪（外甥）の関係である。

〔蜻蛉〕の巻における人物関係図



②と③は、「奥入」が、「遊仙窟」の「氣調キチウ如ニ兄ニ崔季珪サイキケイ之ノ小コ妹イモ容ヨウ貌ボウ似ニ舅ニ潘安仁パンアンニ之外ノ甥シヤウ」から引用されたものだと指摘している。『遊仙窟』の中で、張文成が、衣を洗う女に、目の前の家は誰の家かと尋ねた。この家に住んでいたのが十娘で、女は、b「博陵王之苗裔、清河公之旧族」と答えて、さらに、その十娘のことを、「容貌似舅、潘安仁之外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹。」と言っている。『奥入』以降の古注釈は、この説に従っている。②と③は、『遊仙窟』をただ引用したものではなく、巧みに『源氏物語』の人物関係を取り入れたものになっている。

「蜻蛉」の巻に『遊仙窟』の影響が見られるのは、もう一か所あると考えられる。「蜻蛉」の巻の最後に、薫が自分と姫君たちのことを振り

返った独詠の歌がある。

……あやしうつらかりける契りどもを、つくづくと思ひつづけなが
めたまふ夕暮、蜻蛉のものはかなげに飛びちがふを、
薫「ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしか
げらふ
あるかなきかの」と、例の、独りごちたまふとかや。

〔蜻蛉〕の巻 二七五～二七六ページ

足立雍子氏は、「薫の位相についての一考察——『源氏物語』「蜻蛉」巻後半、「遊仙窟」との関わりを中心に」の論文の中で、「結果的には宇治の三姉妹をも失うことになる薫の現在を言い当てている。（中略）まさに、『遊仙窟』にも上記、薫と同様な描写が見出される。目前にあるように思えるが、手を差し伸べると影か夢のように消えてしまうのである。」と指摘しているが、薫の独詠の歌は、『遊仙窟』の最後の場面に影響を受けたと思われる。

独嘯眉而永結、空抱膝而長吟。

望神仙兮不可見

普天地兮知余心

思神仙兮不可得

覓十娘兮斷知聞

欲聞此兮腸亦乱

更見此兮惱余心

独り眉を嘯めて永結し、空しく膝を抱きて長吟す。

神仙を望めども見る可からず
普き天地も余が心を知らんや
神仙を思へども得可からず
十娘を覓むるも知聞を断つ
此を聞かんと欲すれば腸亦た乱れ
更に此を見んとすれば余が心を悩ます

張文成は、皇帝の使命を帯びて、「神仙窟」に留まり続けられずに十娘と別れた。その後、張文成が、十娘のことが忘れられず、詩を独詠した。「神仙をいくら求めても会うことはかなわず、神仙をいくら思い描いても手に取られず、十娘を探して求めようにも行方は消えた」の意味で、張文成のこれから会えない女性への悲しい気持ちを表わしている。薫は、この『遊仙窟』の詩を踏まえて自分の悲しい気持ちを独詠したのである。

二「若紫」の巻と『遊仙窟』

『源氏物語』が『遊仙窟』から受けた影響は「若紫」の巻にも窺える。前掲の丸山氏の論文の中で、「若紫」の巻の北山の垣間見の部分の概要と遊仙窟の概要を、次のように纏めている。「若紫」の巻の垣間見の北山の部分については、

わらはやみの加持に北山の聖を訪ねた源氏が気晴らしの眺望を樂しむうち、ふと見下した僧都の小柴垣の内に思いがけぬなまめかしい女性の姿を見た。近寄って見れば由緒ありげな「あて」なる尼と

少女であり、若草如き少女の美しさは日夜慕う藤壺にそっくりである。僧都の招きで訪れた幸いに根ほり葉ほり素性を聞けば藤壺の姪に当る娘とか、尼君は少女には祖母あたる人であった。心はずかしい僧都との応対から解放されて一途に祖母の尼を尋ねて歌の贈答をする（後略）。

『遊仙窟』については、

河源に遣された官吏・僕と称する一人称の主人公が行き暮れて到達した所はまさに人跡絶えた仙境であり、古老の指さす神仙窟を尋ねて川を溯れば物洗う婢女を見かけ、一夜の宿を乞うてかいまみれば思いがけない二人の美しい女性が住んでいる屋敷であった。数々の歌の贈答を重ねる内、遂に招じ入れられて一夜の飲をつくし、明けてじしされば歓楽は彼方となる。

両者の関係については、丸山氏は、「このあたりまでの部分と遊仙窟冒頭のやりとりが似ている」と指摘している。

光源氏は、「若紫」の巻で、瘡病にかかった時、ある人に、北山のある寺に優れた修行者がいることを教えられた。光源氏は、その修行者に会うために北山に出かけて、北山の「深き岩の中」で、修行者の聖と会った。「若紫」の巻の話は、繁華な都ではなく、風景別格の北山で展開されている。

『遊仙窟』の冒頭の部分は、

若夫積石山者、在乎金城西南、河所經也。書云、導河積石

至于竜門、即此山是也。

僕從「汧隴」、奉「使河源」。嗟「運命之迍邐」、歎「鄉関之眇邈」。張
騫古迹、十万里之波濤、伯禹遺蹤、二千年之坂障。深谷帶地、鑿
穿崖岸之形、高嶺横天、刀削崗巒之勢。煙霞子細、泉石分明、
冥天上之靈奇、乃人間之妙絶。目所不見、耳所不聞。

日晚途遙、馬疲人乏。行至「一所」、險峻非常。向上則有青壁万
尋、直下則有碧潭千仞。古老相伝云、此是神仙窟也。

余乃端仰一心、潔齋三日。緣「細葛」、泝「輕舟」。身体若飛、精
靈似夢。須臾之間、忽至「松柏巖桃華澗」、香風触地、光彩遍天。
若し夫れ積石山は、金城の西南に在り、河の經る所なり。書
に云ふ、河を積石より導き、竜門に至る、と。即ち此の山是
れなり。

僕「汧隴」從り、河源に使ひするを奉く。命運の迍邐たるを嗟し
み、郷関の眇邈たるを嘆く。張騫の古跡は、十万里の波濤に
して、伯禹の遺蹤は、二千年の坂障なり。深谷地に帶り、崖岸
の形を鑿穿し、高嶺天に横はりて、崗巒の勢を刀削す。煙霞
子細にして、泉石分明なること、実に天上の靈奇にして、乃
人間の妙絶なり。目に見ざる所、耳の聞かざる所なり。

日晚れ途遙か、馬疲れ人乏る。行きて「一所」に至るに、險峻常
ならずして、上には則ち青壁の万尋なる有り、直下は則ち碧潭
の千仞なる有り。古老相伝へて云ふ、此れ是れ神仙の窟なり。

余乃ち端み仰ぎて心を一にし、潔齋すること三日。細葛に緣
り、輕舟を泝らしむ。身体飛ぶが若く、精靈夢の似し。須臾
の間、忽ち松柏の巖桃華の澗に至り、香風地に触り、光彩天
に遍し。

とある。「遊仙窟」の話は、主人公の張文成が皇帝の命令によって、黄
河の源へ行くことから始められている。途中で、張文成は「積石山」と
いう山に入つて行つた。さらに進んで行つて、「一所」(ある所)に着い
て、「古老」によって、この先に「神仙窟」という所があると教えられ
た。後に、この「神仙窟」で、張文成は十娘という女性と一夜を過ごし
た。「若紫」の巻と『遊仙窟』のこの話は、ある原因があつて、ある人
から聞いた話により、都から離れたある山で若い女性を垣間見るといふ
共通した構造を持っている。

田中隆昭氏は、「北山と南岳——源氏物語若紫巻の仙境的世界——」
の論文の中で、「若紫巻では北山が漢詩文的仙境として表現されて、そ
れが物語的な効果をもつのは、源氏と少女との出会いがあり、それが藤
壺の宮の逢う瀬につながり、また明石入道と其のむすめとの出会いにつ
ながつていくからであろう。仙境的表現は女性との出会いがなければ物
語の場合意味をなさない。本来は神仙の女であるはずの女性との出会い
はやはり仙境訪問譚の型を踏んで語られている。」と言つて、仙境の宮
造は仙境訪問譚の物語の展開の礎であると指摘している。⁽¹⁾

これらの先行研究を踏まえて、「若紫」の巻の北山の描写を検討して
いきたい。

④ ……御供に睡ましき四五人ばかりして、まだ暁におはす。やや深う
入る所なりけり。三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎ
にけり。山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするまゝに、霞のた
たずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひたまはず、
ところせき御身にて、めづらしう思されけり。寺のさまもいとあは

れなり。峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りあたりける。

〔若紫〕の巻 一九九―二〇〇ページ

⑤ 明けゆく空はいといたう霞みて、山の鳥ども、そこはかとなう鳴りあひたり。名も知らぬ木草の花どももいろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くもめづらしく見たまふに、なやましさも紛れはてぬ。……僧都、世に見えぬさまの御くだもの何くれと、谷の底まで掘り出で、いとなみきこえたまふ。

〔若紫〕の巻 二一九―二二〇ページ

④は、都と北山の景色が異なることを強調している。もう三月の末であるが、北山では、まだ山桜が咲いている。このような景色を見慣れていない光源氏は、霞がかかった「北山」の景色を眺めて、素晴らしいと思つた。また、⑤は、光源氏が、僧都の坊の前にある「名も知らぬ木草の花ども」やたたずみ歩く「鹿」を見て、心を慰めている。北山の僧都は、光源氏のために、「世に見えぬさまの御くだもの何くれ」を饗した。この「鹿」も、仙境を表現するものである。

一方、「遊仙窟」も、異境訪問譚である。

須臾之間、忽至松柏巖桃華澗、香風触地、光彩遍天。

須臾の間、忽ち松柏の巖桃華の澗に至り、香風地に触り、光彩天に遍し。

張文成は、積石山に入って、「桃華澗」という所にたどり着く。この「桃花澗」は、陶淵明の異境訪問譚「桃華源記」による仙境である。こ

こに十娘の屋敷があり、張文成は十娘と出会つたのである。この仙境は、次のように描写されている。長くなるが、それらの場面を掲げる。

c ……煙霞子細、泉石分明、実天上之靈奇、乃人間之妙絶。目所不
見、耳所不聞。

……煙霞子細にして、泉石分明なること、実に天上の靈奇にして、乃ち人間の妙絶なり。目の見ざる所、耳の聞かざる所なり。

d 遂引入中堂。于時金台銀闕、蔽日干雲。或似銅雀之新開、乍如靈光之巨敞。梅梁桂棟、疑飲澗之長虹、反宇雕甍、若排天之矯鳳。水精浮柱、的礫含星、雲母飾窓、玲瓏映日。長廊四注、争施玳瑁之椽、高閣三重、悉用瑠璃之瓦。白銀爲壁、照曜於魚鱗一、碧玉緣階、參差鴈齒。入穹崇之室宇、步步心驚、見儼闔之門庭、看看眼慘。

遂に引きて中堂に入らしむ。時に金台銀闕、日を蔽ひ雲を干す。或いは銅雀の新たに開けたるが似く、乍ちにして靈光の巨に敞けるが如し。梅梁桂棟は、澗に飲む長虹の疑く、反宇雕甍は、天を排つ矯鳳の若し。水精の浮柱は、的礫として星を含み、雲母の飾窓は、玲瓏として日に映ゆ。長廊は四注にして、争ひて玳瑁の椽を施し、高閣は三重にして、悉く瑠璃の瓦を用ゐたる。白銀もて壁を爲りて、魚鱗より照曜たり、碧玉もて階を縁とりて、鴈齒に参差し。穹崇の室宇に入りては、步步に心驚き、儼闔の門庭を見ては、看看に眼慘む。

e

即相随上_レ堂。珠玉驚_レ心、金銀曜_レ眼。五彩竜鬚_レ席、銀繡縁_レ辺氈、八尺象牙_レ牀、緋綾_レ卻塵褥。車渠瑋_レ瑠、俱映_レ優曇之花_一、瑪瑙真珠、並貫_レ頗梨之線。文栢_レ榻子、俱写_レ豹頭、蘭草燈_レ芯、並燒_レ魚腦。管弦寥_レ亮、分張_レ北戸之間、杯盞交_レ横、列_レ坐南窓之下_一。各自相讓、俱不_レ肯先坐_一。

即ち相随_レひて堂_ニ上_ル。珠玉_ハ心_ヲ驚_カし、金銀_ハ眼_ヲに曜_カす。五彩_ノ竜鬚_ノ席、銀繡_ノ縁_ノ辺_ノ氈、八尺_ノ象牙_ノの牀、緋綾_ノ却塵_ノの褥。車渠_ノ瑋_ノ瑠、俱に優曇_ノの花_ニ映_ヘ、瑪瑙_ノ真珠、並びに頗梨_ノの線_ヲを貫_ク。文栢_ノの榻子、俱に豹頭_ヲを写し、蘭草_ノの燈_ノ芯、並びに魚腦_ヲを焼_ク。管弦_ハ寥_ク亮として、北戸_ノの間に分張_シ、杯盞_ハ交_フ横して、南窓_ノの下_ニに列坐_ス。各自_ハ相讓_リ、俱に肯_テ先_ニじて坐_ゼず。

f

少時桂心_ハ将_テ下酒物_ヲ来。東海_ノ鰻_ノ条、西山_ノ鳳_ノ脯、鹿尾_ノ鹿_ノ舌、乾魚_ノ炙_ノ魚、鴈_ノ醢_ノ荇_ノ菹、鵝_ノ臠_ノ桂_ノ糝、熊掌_ノ免_ノ髀、雉_ノ臠_ノ豺_ノ腎、百味_ノ五_ノ辛、談_レ之不能_レ尽、説_レ之不能_レ窮。十娘_曰、少府亦_レ応_レ太_レ飢。即喚_テ桂心_一。盛_レ飯。下官_曰、向_レ来_レ眼_ノ飽、不_レ覺_レ身_ノ飢。

少時_{シテ}、桂心_ハ下酒_ノの物_ヲを将_テ来_ル。東海_ノの鰻_ノ条、西山_ノの鳳_ノ脯、鹿尾_ノ鹿_ノ舌、乾魚_ノ炙_ノ魚、鴈_ノ醢_ノ荇_ノ菹、鵝_ノ臠_ノ桂_ノ糝、熊掌_ノ免_ノ髀、雉_ノ臠_ノ豺_ノ腎、百味_ノ五_ノ辛、之_ヲを説_クずも尽_クす能_ハず、之_ヲを説_クも窮_ムる能_ハず。十_ニ、娘_曰はく、少府_亦太_ク飢_ニ、太_クに飢_ヒたるべし、と。桂心_ハを喚_ビ飯_ヲを盛_ラし。下官_曰はく、向_レ来_レ眼_ノ飽_キ、身_ノの飢_ヲを覺_エず。

cでは、「目所不見、耳所不聞」と書かれている。dでは、「中堂」の中

に、「梅梁桂棟、疑飲澗之長虹、……碧玉綠階、參差鴈齒。」である。水

に架かる虹のような柱、天翔ける鳳のような屋根、水晶を用いた柱、雲母で飾られた窓、玳瑁の垂木、瑠璃の瓦、白銀の壁、碧玉で縁取られた階段などがある。この「神仙窟」はまるで昔の「銅雀台」や「靈光殿」のようである。さらに、張文成は「中堂」に入って、e「五彩竜鬚席」「銀繡縁辺氈」「八尺象牙牀」「緋綾却塵褥」などまれな調度を見た。その上、「神仙窟」で開いた宴の料理も普通ではない。f「東海鰻條」「西山鳳脯」がある。「東海」は蓬萊、「西山」は崑崙で、いずれも、神話中の仙境である。

積石山の景色、「神仙窟」の調度と食物は、人間の世界と違って、仙境として捉えられる。

以上の「若紫」の巻と『遊仙窟』の描写を見ると、「若紫」の巻の北山の部分と『遊仙窟』は、仙境の营造を工夫して、人間の世界から離れた「山」の「仙境」を営んでいる。

三 「深き岩の中」、「柴の庵」と「神仙窟」

「山」を「仙境」とする描写は、『源氏物語』の前の作品の中にも見られている。

はじめての物語と言われる『竹取物語』の中には、竹取の翁が「野山」でかぐや姫を発見したと描かれている。

いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もの光る竹なむ一すぢあり

ける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしくうてゐたり。

『竹取物語』 一七ページ

竹取の翁は、かぐや姫を山の麓にある家に連れて入れて育てた。物語の末尾に、勅使は天皇の手紙と不死薬を駿河の国にある山の頂で焼いたと書かれている。

帝仰せたまはく、「みやつこまろが家は山もと近かなり。御狩の御幸したまはむやうにて、見てむや」とのたまはず。……勅使には、つきのいはがさといふ人を召して、駿河の国にあたる山の頂にもてつくべきよし仰せたまふ。峰にてすべきやう教へさせたまふ。御文、不死薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。……

『竹取物語』 六六～七七ページ

かぐや姫の発見から物語の最後まで、「山」ということばが多く出てゐる。『竹取物語』においては、「山」が人間の世界と天人の世界を繋がる空間である。

『源氏物語』に大きな影響を与えた『うつほ物語』にも、「山」の「仙境」がある。『うつほ物語』の「俊蔭」の巻に、「北山」という場所がある。元服前の仲忠が母である俊蔭の娘と一緒に暮らしていた所である。

北山は、次のように語られている。

「……この川のみやは、魚はある」と思ひて、下りて、その川より、渡りて、北さまに指して行きて、山に入りて見れば、大きな童、

土を掘りて、物を取り出でて、火を焚きて、焼き集めて、また、大なる木の下に行きて、椎・栗などを取りて、この子を、「何しに、この山はあるぞ」問へば、「魚釣りに来つるぞ、『おもとに食はせ奉らむ』とて」と言へば、「山には、魚はなし。また、生きたる物殺すは、罪ぞ。これを拾ひて食へ」と教へて、この掘りたる物どもを取らせて、童は失せぬ。この子、「うれし」と思ひて、持て行きて、母に食はす。この後は、山に入りて、見せ知らせし芋・野老とこぢを掘りて、木の実・葛の根を掘りて養ふ。雪高う降る日、芋・野老のあり所も、木の実のあり所も見えぬ時に、この子、「わが身不孝ならば、この雪高く降りまされ」と言ふ時に、いみじう高く降る雪、たちまちに降りやみて、日いとうららかに照りて、ありし童出でて、例の芋・野老いかに焼き調じて取らせて、失せぬ。……山深く入りて見れば、いみじういかに厳しき杉の木、四つ、物を合はせたるやうにて立てるが、大きな屋のほどに空き合ひてあるを見て、この子の思ふやう、「ここにわが親を掘る奉りて、拾ひ出でむ木の実をも、まづ参らせばや」と思ひて、寄りて見るに、厳しき牝熊・牡熊、生子み連れて住むうつほなり。……牝熊・牡熊、荒き心を失ひて、涙を落として、親子の愛しさを知りて、二人の熊、子どもを引き連れて、この木のうつほをこの子に譲りて、異峰に移りぬ。

〔俊蔭〕の巻 三八～三九ページ

北山に登場した「大きな童」、雪が降りやむ話、熊が「うつほ」を譲る話は、「北山」の異常性を表わしている。

室城秀之氏の「うつほ物語における日常性と祝祭性」という論文の中で、「北山」は「仙境」である根拠を取り上げている。それは、「俊蔭」

の巻に、兼雅と俊蔭の娘が再び北山で出会う場面の兼雅の称呼である。室城氏は、兼雅の呼称が、北山に入って行く前では「大将」、北山で俊蔭の娘と再会する場面では「客人」、さらに、北山から出てからは再び「大将」と変化することを根拠に、「兼雅が入って行った空間は、兼雅の大將としての世俗的な官職を無化する空間であった。」と指摘している。『うつほ物語』の「北山」は、人間の世界から切り離された「仙境」と考えられる。当時の人にとって、「山」という空間は人間の世界とは異なる世界であったことは、確かなことである。

新聞一美氏は、「源氏物語夕顔巻と遊仙窟―「邂逅相遇」の物語―」という論文の中に、『遊仙窟』の仙境を山の仙境と水の仙境に分けて対照して、『源氏物語』においても、同様に二つの仙境に分けられると指摘している。『若紫』の巻の北山は「仙境」として読めることは前に論じた。ここでは、『若紫』の巻の北山の景色と『遊仙窟』の積石山の景色を比較していきたい。

……山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするまゝに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひたまはず、とこそせき御身にて、めづらしう思されけり。寺のさまもいとあはれなり。峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りありけり。

〔若紫〕の巻 二〇〇ページ

「若紫」の巻の「北山」の「山の桜」「霞のたたずまひ」「峰高く」「霞わたり」などの表現は、漢詩文によく見られる。『遊仙窟』の仙境の景色の部分も、似ている描写がある。

深谷帯地、鑿穿崖岸之形、高嶺横天、刀削崗巒之勢。煙霞子細、泉石分明、実天上之靈奇、乃人間之妙絶。目所不見、耳所不聞。……須臾之間、忽至松柏巖桃華澗、……

深谷地に帯り、崖岸の形を鑿穿し、高嶺伝に横はりて、崗巒の勢を刀削す。煙霞子細にして、泉石分明なること、実に天上の靈奇にして、乃ち人間の妙絶なり。目に見ざる所、耳の聞かざる所なり。……須臾の間、忽ち松柏の巖桃華の澗に至り、……

『遊仙窟』の「桃華澗」「煙霞子細」「高嶺横天」は、『若紫』の巻の「北山」の「山の桜」「霞のたたずまひ」「峰高く」を漢文で表現したかのようである。

いっぽう、『若紫』の巻に登場する「聖」が住む場所は、

……寺のさまもいとあはれなり。峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りありけり。

〔若紫〕の巻 二〇〇ページ

と語られている。

新編古典日本文学全集の解釈によると、「深き岩の中」は「岩に囲まれた奥深い所」である。北山の「聖」が「深き岩の中」に住んでいるという設定は、「聖」に神仙的な雰囲気を与えている。さらに、ある人の発言によって、「聖」が瘡病をも治す特殊な能力を持っているということも分かる。光源氏は、北山での二日目を北山の僧都の坊で過ごした。

すなはち僧都参りたまへり。法師なれど、いと心恥づかしく、人柄もやむごとなく世に思はれたまへる人なれば、軽々しき御ありさ

まを、はしたなう思す。かく籠れるほどの御物語など聞こえたまひて僧都「同じ柴の庵なれど、すこし涼しき水の流れも御覽せさせん」と、切に聞こえたまへば、かのまだ見ぬ人々に、ことごとしう言ひ聞かせつるをつつましよう思せど、あはれなりつるありさまもいぶかしくておはしぬ。

〔若紫〕の巻 二二〇—二二一ページ

北山の僧都は、光源氏に、自分が住む坊を「柴の庵」と言っている。つまり、「草庵」である。実は、北山の聖の「深き岩の中」や北山の僧都の「柴の庵」には、『遊仙窟』にも見られる。それは、『遊仙窟』の女性主人公の十娘の住む場所である。

見下 一女子向水側流衣。余乃問曰、承聞此処有神仙之窟宅、故来伺候。山川阻隔、疲頓異常、欲下投娘子、片時停歇上、賜惠交情、幸垂聽許。女子答曰、児家堂舍賤陋、供給單疎、只恐不堪、終無格惜。余答曰、下官是客、触事卑微、但避風塵、則爲幸甚。遂止余於門側草亭中、良久乃出。

一女子の水の側に衣を流ふを見る。余乃ち問ひて曰はく、承り聞くに此処に神仙の窟宅有り、故に來りて伺候。山川阻隔し、疲頓すること異常にして、娘子に投じて片時停歇せんことを欲す、交情を恵むを賜らん、幸に聽許するを垂れる。女子答へて曰はく、児家が堂舎は賤陋にして、供給も單疎なり、只た恐らくは堪へざらんも、終に格惜すること無からん、と。余答へて曰はく、下官是れ客にして、触事卑微なり、但だ風塵を避ければ、則ち幸甚と爲す、と。遂に余を門の側の草亭の中に止め、良久しくして乃ち出つ。

張文成は、川沿いに衣を洗う女を見て、自分が「神仙之窟宅」を尋ねてここに至つたと言つて、女に一夜の宿を乞うて、「草亭」の中で、返事を待っていた。

張文成は、十娘と初対面して、十娘の屋敷を「神仙窟」と称呼した。

……誰知対面、恰是神仙。此是神仙窟也。

……誰か知らん面に対へば、恰に是れ神仙なり。此れ是れ神仙の窟なり、と。

「草亭」や「窟」は、道教の「無為」の神仙思想の具体的な表現でもあり、隠棲者の印でもある。『遊仙窟』に、十娘は戦乱を逃れるために、隠棲者となつたとも語られている。

……十娘答曰、児是清河崔公之末孫、適弘農楊府君之長子。孰成三大礼、随父住于河西。蜀生狡猾、屢侵辺境。兄及夫主、棄筆從戎、身死寇場、骸魂莫返。兒年十七、死守一夫、嫂年十九、誓不再醮。兄即清河崔公之第五息、嫂即太原王公之第三女。別宅於此、積有歲年。室宇荒涼、家途窮弊。不知上客從何而至。

……十娘答へて曰はく、児は是れ清河の崔公の末孫にして、弘農の楊府君の長子に適き。孰に大礼を成し、父に随ひて河西に住む。蜀生狡猾にして、屢しば辺境を侵す。兄及び夫主は、筆を棄てて戎に従ひ、身は寇場に死して、骸魂返る莫し。兒は年十七にして、死すも一夫を守り、嫂は年十九にして、再醮せ

ざるを誓ふ。兄は即ち清河の崔公の第五息にして、嫂は即ち太原公の第三女なり。別れて此に宅し、積みて歳年有り。室宇荒涼として、家途翳弊す。知らず上客何従りして至れるかを、と。

十娘は清河公の子孫であるが、兄と夫が戦争中で亡くなって、五嫂とこの「神仙窟」に住むことになった。「窟」や「草亭」は十娘と五嫂の隠棲者の身分を暗示している。「若紫」の巻の場合は、「北山の聖」と「北山の僧都」を「深き岩の中」と「柴の庵」に住ませて、両者ともに仙境に住んでいる人間を表すと考えられる。

『遊仙窟』の積石山の「神仙窟」「草亭」「若紫」の巻の北山の「深き岩の中」「柴の庵」は全てに仙境の中の建物である。「若紫」の巻の北山は、『遊仙窟』の仙境を参考して、「北山」に「深き岩の中」と「柴の庵」を設置したと考えられるだろう。

四 仙境の女性の素性

「若紫」の巻の「北山」と『遊仙窟』の「積石山」はともに「仙境」として読めることを論じた。田中氏は、前掲の論文で、

仙境的表现は女性との出会いがなければ物語の場合意味をなさない。本来は神仙の女であるはずの女性との出会いはやはり仙境訪問譚の型を踏んで語られている。

と論じて、物語の仙境の描写と女性の出会いの重要性を強調している。

「若紫」の巻に、光源氏が小柴垣から少女の可愛い姿を垣間見る場面は有名である。

『遊仙窟』の垣間見の場面は

余読し詩訖、拳頭門中、忽見十娘半面。余則詠曰、

斂咲偷残齧 含羞露半脣

一眉猶回耐 雙眼定傷人

余詩を読み訖へて、頭を門中に挙ぐるに、忽として十娘の半面を見る。余即ち詠じて曰はく、

咲みを斂めて残齧を偷め 羞を含んで半脣を露にす
一眉すら猶ほ耐ともする回し 雙眼定めて人を傷ましめん

とある。張文成は一夜の宿を借りて、不意に十娘の箏の音が聞こえて、十娘に詩を送った。やがて届けられた返事の詩を読み終えて、顔をあげた張文成の目に、突然、十娘の「半面」がちらりと見て、あまりの美しさに、張文成の心は引け付けられた。『遊仙窟』の恋愛話は、「垣間見」から始められている。

「若紫」の巻の場合は、光源氏が少女を垣間見て、北山の僧都に若紫の素性を尋ねた。

源「ここにもものしたまふは、誰にか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」と聞こえたまへば、うち笑ひて僧都「うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。尋ねさせたまひても、御心劣りせさせたまひぬべし。故按察大納言は、世に亡くて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむ、

なにがしが姉妹にはべる。かの按察隠れて後、世を背きてはべるが、このごろわづらふ事はべるにより、かく京にもまかでねば、頼もし所に籠りてものしはべるなり」と聞こえたまふ。

〔若紫〕の巻 二二二ページ

この素性を尋ねた場面が『遊仙窟』の張文成と衣を洗う女子の間の問答が似ていることは従来から指摘されている。

見下女子向水側一洗上し衣。……

余問曰、此誰家舎也。女子答曰、博陵王之苗裔、清河公之旧族。容貌似舅、潘安仁之外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹。

一女子の水の側に衣を洗ふを見る。……

余問ひて曰わく、此れ誰家の舎ぞや。女子答へて曰はく、博陵王の苗裔にして、清河公の旧族なり。容貌は舅に似て、潘安仁の外甥、氣調は兄の如くして、崔季珪の小妹なり。

〔若紫〕の巻の光源氏も『遊仙窟』の張文成も、垣間見られた女性の素性を第三者に尋ねている。この描写には、どのような深い意味があるだろうか。

光源氏は、北山の僧都から、この少女が、兵部卿の親王の娘で、藤壺の宮の姪であることを知らされる。『遊仙窟』では、衣を洗う女子から、十娘が、「博陵王之苗裔、清河公之旧族。容貌似舅、潘安仁之外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹。」だと知らされた。「博陵王」は東漢末から唐代まで続いた貴族社会における名族の一つ、「清河公」も名族の一つ、「潘安仁」は、西晋の詩人潘岳のことを指し、「安仁」は字であり、美男で

あったことでも知られているし、「崔季珪」は、三国魏の崔琰のことである。「季珪」は字で、風采のある男子として威厳があった。いずれも、中国の昔からの名門の代表である。実際は、十娘は「清河崔公之末孫」である。衣を洗う女子は十娘の家柄の良さを強調するために、当時の名門を組み合わせた。仙境の中に、身分の高い女性がいることを示している。

〔若紫〕の巻は、この会話の描写を借りて、北山の僧都の答えによって、紫の上の高貴な出身であることを表して、紫の上と藤壺の繋がりを示した。紫の上と光源氏の身分が似合うことを暗示しているのではないだろうか。

おわりに

『源氏物語』の「若紫」の巻の北山の部分と『遊仙窟』は、両者ともに辺鄙な所で男が女を垣間見て、男が女に心を惹かれた話である。両者の構造と描写が通じるところが多い。『源氏物語』には、物語の女性主人公、紫の上が「若紫」の巻から登場している。物語の作者は、紫の上の登場のために、「北山」という仙境を描いている。この「北山」の仙境には、『遊仙窟』の要素も見られる。その上、「若紫」の巻にのみ出ている「北山の聖」と「北山の僧都」の設定にも『遊仙窟』が影響を与えている。

注

(1) 特にことわりがない限り、古典本文(『万葉集』、『竹取物語』、『源氏物語』、『和漢朗詠集』)の引用は小学館新編日本古典文学全集による。『新撰朗詠集』

- は「和歌文学大系47」による。『うつほ物語』の本文は、室城秀之氏の『うつほ物語 全 改訂版』(おうふう)による。『遊仙窟』の本文は、「中国古典小説選4」(明治書院)によって、異なる部分は醍醐寺『遊仙窟』(『古典籍索引叢書13』古典研究会)を参照した。
- (2) 明朝の小説『春夢瑣言』の序文に、「蓋世有張文成者、所著游仙窟、其書極淫之事、亦往往有詩、其詞尤陋寢不足頁、至写嬾台之态、不过、脉张气怒、頃刻数接之数字、顿觉无余味。」と書いている。明まで読まれていたと思われる。
- (3) 『遊仙窟』の現存する写本の中で、最も古いのは、実践女子大学山岸文庫蔵の正応元年(一二八八年)の奥書が有り、有注本である。残念ながら、現存する部分が全書の一割にしかも過ぎしかない。奥書あり、有注の元亨元年(一二三二年)の金剛寺本も前後不全である。完存するのは、康永三年(一三四四年)の醍醐寺本、文和二年(一二三三年)の真福寺本である。両者ともに無注本である。その他は、嘉慶三年(一三八九年)の陽明文庫本がある。江戸時代に入って、文保三年の(一二三二年)江戸初期無刊期本、慶安五年(一六五二年)刊本、元禄三年(一六九〇年)刊本なども刊行されていた。
- (4) 遊仙窟曰、九泉下人、一錢不直。(『万葉集』巻五「沈痾目哀文」)
- (5) 「遊松浦川序」は、『文選』の情賦群や『遊仙窟』を模倣して作ったフィクションである。(新編日本古典文学全集の頭注による)。
- (6) 705 容貌似舅、潘安仁之外甥。氣調如兄、崔季珪之小妹。(遊仙窟)『和漢朗詠集』下 妓女)
- 778 更闌夜静長門閉而不開 月冷風秋团扇查而共絶 張文成策文(『和漢朗詠集』下 恋)
- (7) 732可憎病鶴半夜驚人、薄媚狂鷄三更唱曉 張文成(『新撰朗詠集』)
- (8) むかし張文成と云ふ人ありけり。……この文は遊仙窟と申て、我国にも伝はれり。后是を見給ふたに御身ほろひぬへくおほされけり。唐の高宗の后に則天皇后の御事也。(『校本唐物語』池田利夫編 笠間書院刊 昭和六四年一月)
- (9) 定家自筆本「奥入」(『複製日本古典文学館』釈文 日本古典文学会編 昭和四七年一〇月一日)
- (10) 『河海抄』の中、『遊仙窟』による注は五四ヶ所がある。(『紫明抄』素寂著・河海抄/四辻善成著)玉上琢彌編 角川書店 昭和四三年六月)
- (11) 丸山キヨ子「源氏物語・伊勢物語・遊仙窟——わかむらさき北山・はし姫宇治の山荘・うひかうぶりの段と遊仙窟との関係——」(『日本文学』東京女子大学日本文学研究室 昭和三十六年 二月)
- (12) 『弄花抄』(『源氏物語古注集成 第八巻』伊井春樹編 桜楓社 昭和五八年 四月)
- (13) 足立雅子「薫の位相についての一考察——『源氏物語』「蜻蛉」巻後半、『遊仙窟』との関わりを中心に」(『埼玉女子短期大学研究紀要』第二二号 平成二二年三月)
- (14) 田中隆昭「北山と南岳——源氏物語若紫巻の仙境的世界——」(『国語と国文学』平成八年一〇月)
- (15) 注(14)の論文の指摘による。
- (16) 『うつほ物語の表現と論理』室城秀之(若草書房 平成八年 二月二九日)
- (17) 新間一美「源氏物語夕顔巻と遊仙窟——「邂逅相遇」の物語——」(『源氏物語とアジア』新典社 平成二二年)
- (18) 注(12)の論文の指摘による。